

V. まとめ

1. 岩ヶ平刻印群No. 19 刻印石の意義

今回の調査では、徳川大坂城関連の遺構・遺物は刻印石1（岩ヶ平No. 19）と刻印石2（岩ヶ平No. 62）のみで、大坂城再築にかかわる近世初頭の石材探査遺構は検出されなかった。しかし、刻印石1（岩ヶ平No. 19）は上面に回・口、西側面に○と計3個の刻印が確認され、本文でも記したように前者は小浜藩京極家、後者は鳥取藩池田家の刻印と推定される。

一石に複数の刻印が刻まれた資料はこれまでにも多数確認されているが、このように一石の別面に異なる藩の刻印がみられる例は、従来の採石場調査の中ではまったく見になかった。ところが、1988年に確認された吳川遺跡出土石材のうち2号石材と3号石材（いずれも調整石）で、初めて複数藩刻印をもつ例を確認した。すなわち2号石材では播磨赤穂藩池田家冂と帰属藩不明の団、3号石材では松江藩堀尾家の○と長州萩藩毛利家の○がそれぞれ別面に刻まれており、二つの藩の間で石材の放棄・譲渡・売買など所有権移動のあったことが推定された。さらには、小浜藩京極家の団刻印をもつ石材（調整石）も含めてほぼ同所より出土したことから、少なくとも運搬工程において複数の藩による協業が行われていた可能性も考えられた〔森岡・古川 1992〕。

この吳川遺跡例は、船積み前の集石場と考えられる海浜部での出土であり、採石場そのもので一石に明瞭な複数藩刻印をもつ資料はやはり知見になかった。したがって、今回調査した岩ヶ平No. 19 刻印石が最初の確認になるわけであるが、本調査の終了後、南に隣接する山林（六麓荘町74番地2・3および72番地）において筆者の自主調査としておこなった刻印石分布調査でNo. 19 刻印石と同じ回・○の刻印が同一面に刻まれている例を確認した（No. 64写真5）。

さらにこの山林内では、鳥取藩関係のものであることが明らかな伊木三十郎刻印3石（No. 65・67・70写真15）と○一石（No. 68）、小浜藩京極家のものと思われるNo. 19 a刻印と同じ回を2石（No. 63・69）、所属不明の○刻印（No. 66）の計8個の刻印石を検出した。中でも、鳥取藩のNo. 65とNo. 68は小浜藩のNo. 69を隣接して挟む位置にあり、加えてNo. 19・No. 64の南側にあってあたかも尾根上に並ぶような位置関係をもっている。そして、この尾根より西側の小谷筋では明白な鳥取藩関係の刻印は確認することができず、これまで所属藩を明らかにできていなかった①が圧倒的に優勢な分布（9個—No. 6・12・13・24・25・48・53・54・58）を示し、逆にこの①が尾根より東ではまったく認められることから、二つの藩の採石領域の境界線がこの尾根筋に存在していた可能性が考えられる。

もう少し範囲を広げて刻印分布状況を検討すると、伊木三十郎刻印のうち最も南に位置する六麓荘町101番地のNo. 35・36・37（写真10・13・9）から北西方向の尾根に向けて、同じく伊木刻印のNo. 67・70・65があり、その北西尾根筋に回と○を併存するNo. 64・19が存在す

る。さらに北西方向をみると、六麓荘町 39 番地では \ominus をもつ № 52 が東、④を刻む № 53 が西に隣接し、もう一区画北西側の六麓荘町 28 番地でも、伊木刻印の № 46 と \ominus の № 47 が東、④の № 12(写真 12)が西に相接して確認されている。このように見ると、南の六麓荘町 101 番地から北の 28 番地まで、明らかに一本の線上に並んで領域境界を示しているとみられ、№ 19 刻印石はまさにその境界上に存在していると言えそうである。

ちなみに回の刻印は、□と共にこれまで西宮市苦楽園五番町周辺でのみ検出されており、この付近が小浜藩の採石領域であろうとの推定していた。一方、今回調査地の西側、芦屋大学・芦屋学園短大の所在する谷筋は、前述のように所属藩不明の④(写真 6)が優勢で、なおかつ別種刻印の積極的な分布がみられないことから、芦屋学園短大の学舎を中心とする南北 600 m 程の範囲は、ある一藩の占有採石領域ではないかと推定していた。残念ながら④は大坂城で検出されていないことから、それがどこの藩かを明らかにできなかった。ただ、現芦屋大学構内より移設したと伝えられる № 26 の 鎏 是明らかに小浜藩のものであるため、④も小浜藩の刻印ではないかとも考えたが、鎔 是原位置を保たない № 26 のみの検出であるため、確信を持つにいたらなかった。

今回、№ 19とともに № 63・64・69 で回を検出し、それらの所在する小尾根筋に北西—南東方向の採石領域境界を推定してみると、やはり④も回と同じ小浜藩の刻印と推定することができそうである。つまり、この採石領域境界は西の小浜藩と東の鳥取藩を分けるものであることが明らかになったといえよう。№ 19 の回と \ominus は、ここがその境界上にあたることを示していたわけである。

岩ヶ平刻印群全体での確認刻印石数が 40 に満たなかった 10 年程前までは、多種類の刻印が錯綜する分布状態から複数藩が採石していることは推定されたものの、採石主体や採石領域を明らかにすることは不可能ではないかと考えていた。しかしその後の調査で刻印石数が飛躍的に増加し、確認数 70 個に達した今日では、刻印種ごとの明瞭な分布偏在性を指摘することができ、それが各藩のおおまかな採石領域を示すのではないかと考え得るにまでいたっている。

その概要を記すと、芦屋学園中高部以北の六麓荘町北部から西宮市苦楽園四番町にかけては、回のみ 4 個が確認されており出雲松江藩堀尾家の採石領域と思われる。その南東側、西宮市苦楽園五番町を中心とする地域は、前述のごとく回□が集中し小浜藩京極家の領域であろう。芦屋学園中高部の西側、南北約 500 m・東西 150 m 程の範囲は、伊木三十郎刻印 11 個と \ominus が合わせて 12 個確認されており、明らかに鳥取藩池田家の採石領域である。その西側、芦屋学園短大の所在する小谷筋の南北 600 m 程は、やはり前述のように④と回 鎔 を代表刻印とする小浜藩京極家の採石地であろう。さらに西隣は、芦屋大学の所在する長背尾根を境として広大な長州藩毛利家の採石場（奥山刻印群 K 地区）が広がっている〔森岡編 1998〕。北方の山麓部（字劍谷）は調査が進んでいないので、検出刻印数は少ないが、六麓荘浄水場の北側で明らかに熊本藩加藤家の刻印と見られる④と、唐津藩寺沢家の刻印 一 が確認されており、この二藩の採石領域が設定されているとみられる。

以上のように、岩ヶ平刻印群では現段階で小浜藩京極家・鳥取藩池田家・松江藩堀尾家・熊本藩加藤家・唐津藩寺沢家の五藩の採石を確認することができる。一方、六龍荘町南端から岩園町にかけての岩ヶ平刻印群南部地域では、明瞭に所属藩を確定できる刻印がなく、今のところ採石主体・領域を明らかにし得ない。

2. 近世末から近代の採石遺構について

今回検出した石材採掘坑1・2は、近世初頭の大坂城再築に伴うものではなく、近世末から近代の採石遺構と考えられた。同時期の石材採掘坑は、発掘調査で確認された例は未だ少なく、芦屋市内では1998年度の八十塚古墳群岩ヶ平22号墳の調査に伴って検出されたものがあるくらいである。

しかしながら地表観察では市内の山中・山麓のいたるところで確認され、小型の矢穴を伴う割石や鋭利な破断面をもつ石屑が散乱するところは枚挙に暇がない。大坂城関連の採石が行われているところ、すなわち石材が地表に多数露出し搬出可能な場所では、手当たりしだいに採石しているとさえいえる。奥山刻印群の分布する標高400mの山中では、半製品が集積された場所も確認している。

近世中期以降大きくなった住吉村産出の「銘石御影石」の名声の中で、類似石材を産出する打出村（岩ヶ平は旧打出村枝郷）・芦屋村が、個々の採石規模は小さいながら、いかに大量の石材を産出したかを示しているわけで、時期は新しいといえども芦屋市の特性を表した貴重な産業遺構として位置づけることができるであろう。

3. 遺跡地の取り扱い

発掘調査の結果、調査区において保存協議が必要となった文化財および遺構は、下記のとおりである。それぞれについて、現地調査の完了後、工事施工業者を通じて地権者の合意を得、以下に示すように取り扱いを決定した。

- ① 刻印石1は矢穴列および刻印a・b・cの3カ所を有する巨石で、今回の建築工事において支障をきたす場所にあることから、移動や断割を行わず現状保存の取り扱いとした。
- ② 刻印を1カ所検出した刻印石2については、工事計画区域に入り、損傷することが明らかなため、敷地内の安全な場所に移設し、庭石として保存を図る取り扱いとした。
- ③ 採掘坑1・2については、工事により損壊が避けられないため、記録保存することで合意をみた。

また、工事の開始に際しては、市教育委員会の方に連絡するよう申し入れ、一部は工事立会に関する協力を要請した。

(森岡秀人・古川久雄)

参考文献一覧

(岩ヶ平刻印群関係 刊本)

- ① 藤川祐作 1976 「八十刻印群の復元－徳川大坂城の研究3」『わだち』12号 わだち編集部（孔版刷）
- ② 藤川祐作 1979 「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会
(同書収録の「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」の付論として収載)
- ③ 森岡秀人編 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)』<芦屋市文化財調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
- ④ 藤川祐作 1982 「徳川大坂城 東六甲採石場(西宮市所在)」『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』
<文化財資料23号> 西宮市教育委員会
- ⑤ 森岡秀人 1986 「埋蔵文化財メモリアル'80~'85」<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦屋市教育委員会
- ⑥ 古川久雄 1988 「徳川大坂城の採石場」『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会
- ⑦ 古川久雄編 1990 「八十塚岩ヶ平支群第10号墳の調査－古墳攝墳にともなう確認調査－」<芦屋市文化財調査報告第20集> 芦屋市教育委員会
- ⑧ 森岡秀人・白谷朋世 1992 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳の発掘調査」『平成3年度国庫補助事業 芦屋寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』<芦屋市文化財調査報告第22集> 芦屋市教育委員会
- ⑨ 古川久雄 1992 「岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刻印の発見」『蘆健』65号 芦の芽グループ
- ⑩ 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世編 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第24集> 芦屋市教育委員会
- ⑪ 森岡秀人・白谷朋世編 1994 『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町94番地(八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場)』<芦屋市文化財調査報告第25集> 芦屋市教育委員会
- ⑫ 古川久雄編 1999 『兵庫県芦屋市・西宮市所在 岩ヶ平刻印群 刻印石資料集』 摂陽文化財調査研究所
- ⑬ 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第40集> 芦屋市教育委員会

(岩ヶ平刻印群関係 芦屋市教育委員会発行実績報告書)

- (1) 森岡秀人・古川久雄 1989 『徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－芦屋市六麓荘町113番地1・2所在(平成元年度埋蔵文化財調査概要19)』(高田邸)
- (2) 和田秀寿 1993a 『六麓荘町79番地試掘調査略報』(巽邸)
- (3) 和田秀寿 1993b 『六麓荘町2番地試掘調査略報』(辰野邸)
- (4) 森岡秀人・白谷朋世 1993 『六麓荘町94番地埋蔵文化財分布調査略報』
- (5) 竹村忠洋 1998a 『平成9年度 岩ヶ平刻印群(真鍋邸)発掘調査実績報告書』
- (6) 竹村忠洋 1998b 『平成9年度 岩ヶ平刻印群(比屋根現)発掘調査実績報告書』
- (7) 竹村忠洋・古川久雄 1999 『平成11年度 岩ヶ平刻印群(芦屋学園)発掘調査実績報告書』
- (8) 竹村忠洋 2000 『平成11年度国庫補助事業 岩ヶ平刻印群(原田邸)発掘調査実績報告書－震災復興調査』
- (9) 竹村忠洋・森岡秀人 2001 『岩ヶ平刻印群(国光邸)確認調査概要報告書』
- (10) 古川久雄 2001 『岩ヶ平刻印群 第11次(国光邸)発掘調査実績報告書』

(徳川大坂城東六甲採石場関係 刊本)

- 村川行弘 1962 『大坂城と芦屋』<芦屋市文化財調査報告第2集> 芦屋市教育委員会
芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会編 1969 『昭和43年度芦屋市文化財パトロール調査報告 芦屋及び西宮の刻印石調査資料』(芦の芽資料編第2集) 芦の芽グループ(孔版)
- 村川行弘 1970 『大坂城の謎』 学生社
- 有坂隆道・村川行弘 1971 『大坂城と芦屋』『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 藤川祐作 1972 『摂津大坂城(六)－芦屋山中の採石場－』<城と陣屋65号> 日本古城友の会

- 岩本昌三・藤川祐作 1979 「大坂城と採石地芦屋の刻印石」『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』
芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1980 「奥山刻印群」「芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表(第1分冊)」<芦屋市文化財
調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1985a 『根津大阪城(十)－徳川大阪城東六甲採石場甲山刻印群－』<城と陣屋 168号> 日本
古城友の会
- 藤川裕作 1985b 「徳川大阪城・東六甲採石場採石場の西限の再考」『郷土史料室だより』'85夏- ゆり号
芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1988 「武庫郡誌」にみられる大阪城石材についての再検討』『歴史研究手帖』2 神戸歴史研
究会(神戸深江生活文化史料館内)
- 藤川祐作 1990 「西宮市西平町遺存の分銅刻印石について」『蘆橘』第61号 芦の芽グループ
- 藤川祐作 1991 「六甲山系の徳川大阪城採石場と積み出し地－芦屋市吳川町発見の新資料を中心に－」『歴
史と神戸』第168号 神戸史学会
- 森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例－兵庫県芦屋
市吳川町出土の大坂城再築関係石材について－」『阡陵』(関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集) 関西大学
- 森岡秀人 1993a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(1)」「なりひら」第13号 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人 1994a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(2)」「なりひら」第14号 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人編 1998 『徳川大阪城東六甲採石場I－芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調
査－』<芦屋市文化財調査報告第31集> 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1998 「奥山刻印群K地区における毛利氏所用刻印の分布と意義」『徳川大阪城東六甲採石場I』
<芦屋市文化財調査報告第31集> 芦屋市教育委員会

(徳川大阪城東六甲採石場関係 実績報告・発表資料等)

- 芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会・刻印調査研究会編 1968～1973 『刻印調査資
料』1～32号 芦の芽グループ (青刷)
- 森岡秀人 1990 『芦屋市松ノ内町56番、58番、60番 平見秀市氏所有地の刻印調査』(終了報告) 芦屋
市教育委員会
- 藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1992 『芦屋墓園整備拡張に係る埋蔵文化財調査実績報告』 芦の芽グループ
- 藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1993 『芦屋墓園整備拡張に係る第2次埋蔵文化財調査実績報告』 芦の芽グループ
- 古川久雄 1993 『徳川大阪城東六甲採石場－調査研究 25年の歩みと課題－』(考古学研究会関西例会第65
回研究会発表資料) 考古学研究会
- 森岡秀人 1993b 『芦屋市吳川遺跡埋蔵文化財摸擬確認調査報告』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1994b 『芦屋市中央道敷設事業に伴う吳川遺跡B地点工事立会調査終了報告』 芦屋市教育委員
会

(徳川大阪城と築城石)

- 岡本良一 1970 『大阪城』(岩波新書739) 岩波書店
- 志村 清 1970 『大阪城今昔』(日本古城友の会編) 日本城郭資料出版会
- 藤井重夫 1970 『根津大阪城』<城と陣屋> 浪速社
- 藤井重夫 1977 『大阪城石垣調査報告書 其一』 築城史研究会
- 藤井重夫 1981 『大阪城の石垣符号』『日本城郭大系』12 大坂・兵庫 (城郭調査こぼれ話) 新人物往来社
- 藤井重夫 1982 『大阪城石垣符号について』『大阪城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
- 藤井重夫 1983 『根津大阪城(七)－生駒山系の石切場について－』<城と陣屋 158号> 日本古城友の
会
- 藤井重夫 1984 『根津大阪城(八)－主として瀬戸内六口島・樺石島の採石場跡調査報告』<城と陣屋
161号> 日本古城友の会
- 藤井重夫 1989 『石からみた大阪城と城下町』『よみがえる中世(2)一本願寺から天下統一へ－大阪』平凡社

(その他)

- 兵庫県教育委員会 2000 『兵庫県遺跡地図－第1分冊 (発掘調査の手引・遺跡地名表)』

写 真 図 版



調査前全景
(南西から)



刻印石 I と II 区発掘前
(南西から)



I 区発掘前
(西から)



I区地山面検出状況
(西から)



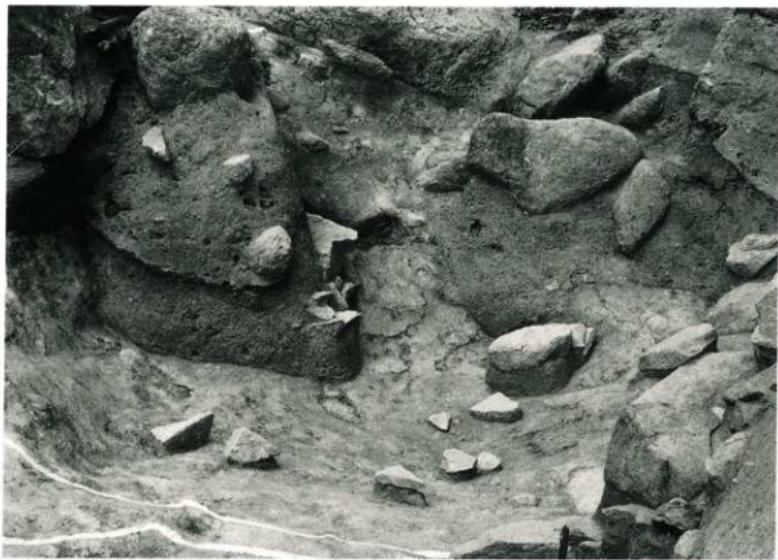
I区北壁土層断面
(南西から)



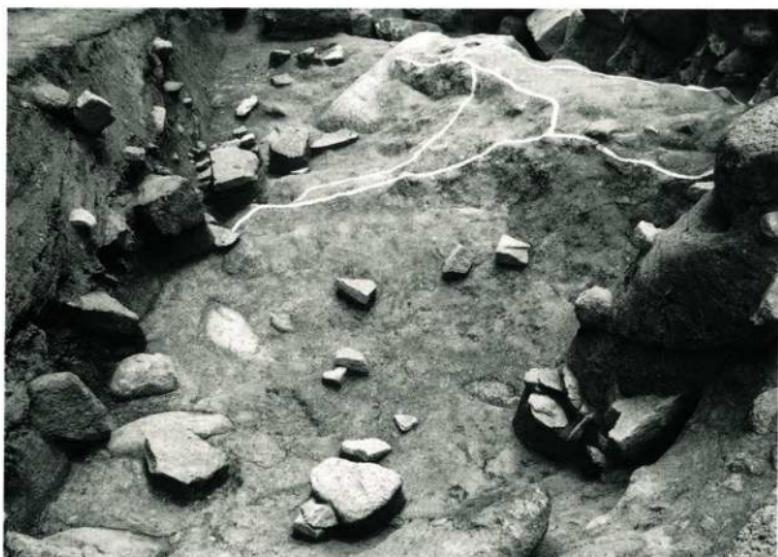
I区北壁土層断面
(東から)



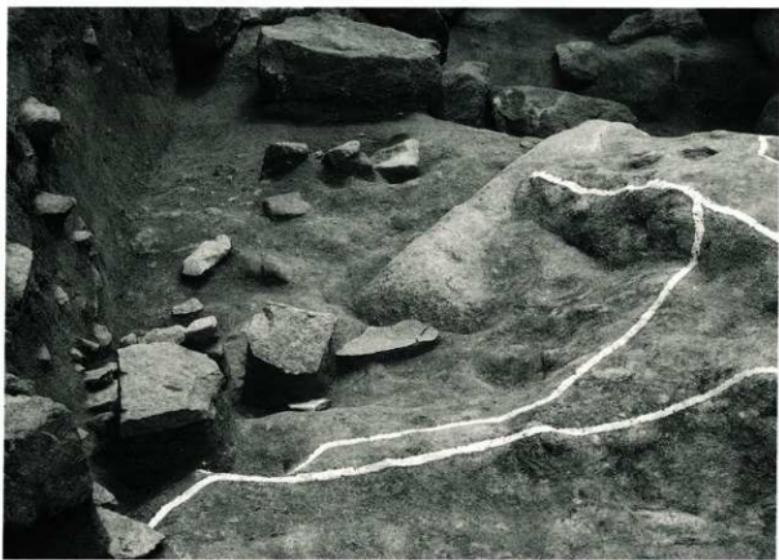
II区完堀 石材探掘坑1・2検出状況（南西から）



II区完堀 石材探掘坑1検出状況（南西から）



II区完堀 石材探掘坑 1・2 検出状況（北東から）



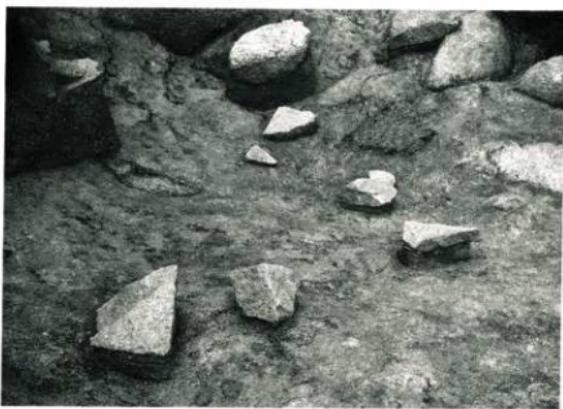
II区完堀 石材探掘坑 2 検出状況（北東から）



II区南北畦 土層断面（南西から）



II区全景と南壁土層断面（北西から）



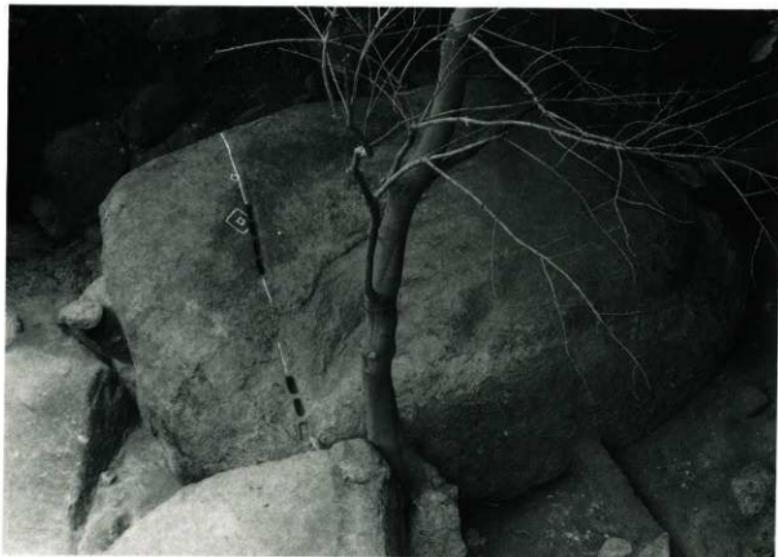
II区石材採掘坑 1
小割石出土状況
(西から)



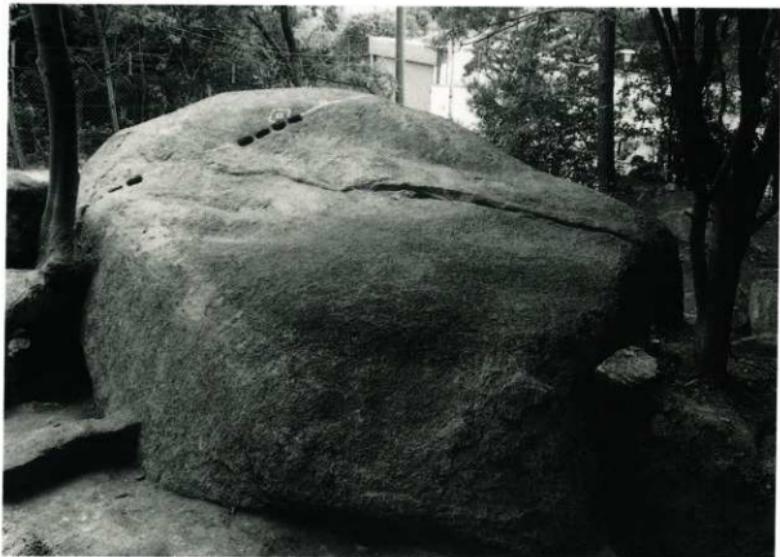
II区石材採掘坑 1
小割石出土状況
(南西から)



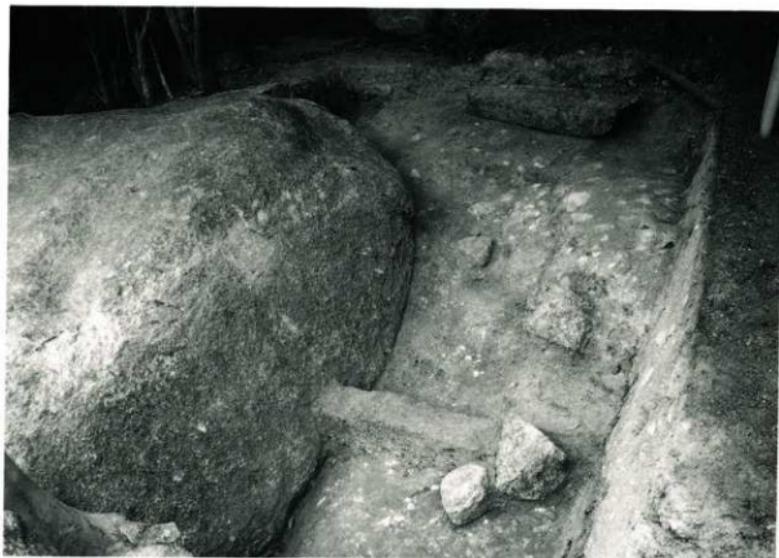
II区石材採掘坑 2
小割石出土状況
(北から)



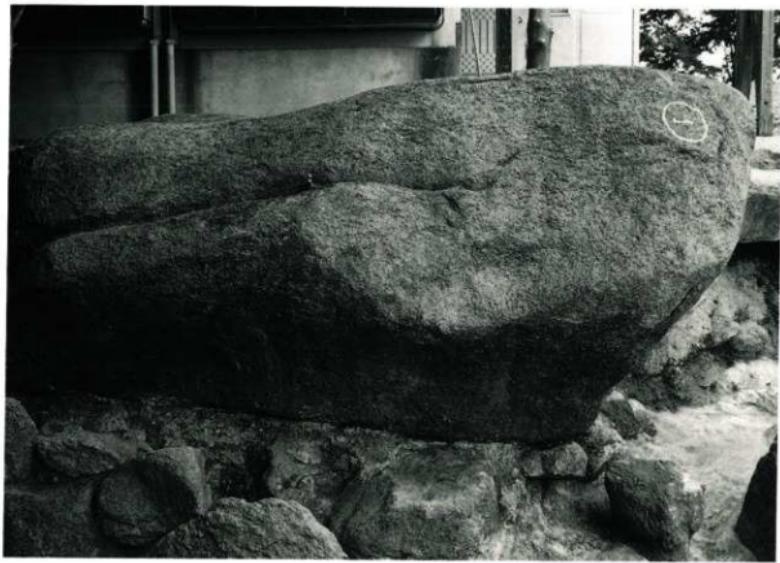
刻印石 1 全景（東から）



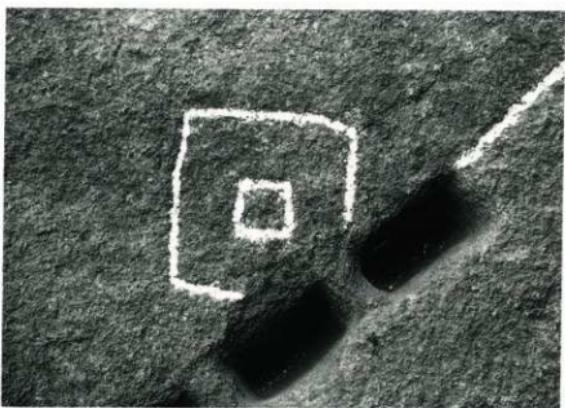
刻印石 1 全景（北から）



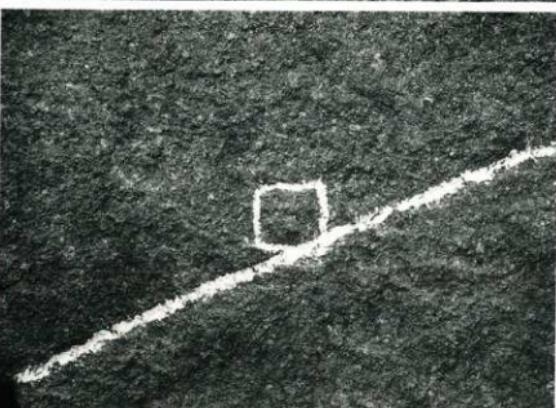
III区 地山面検出状況



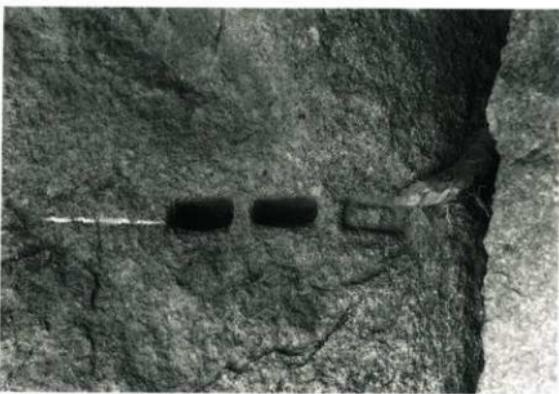
刻印石 1 全景（南西から）と刻印 b



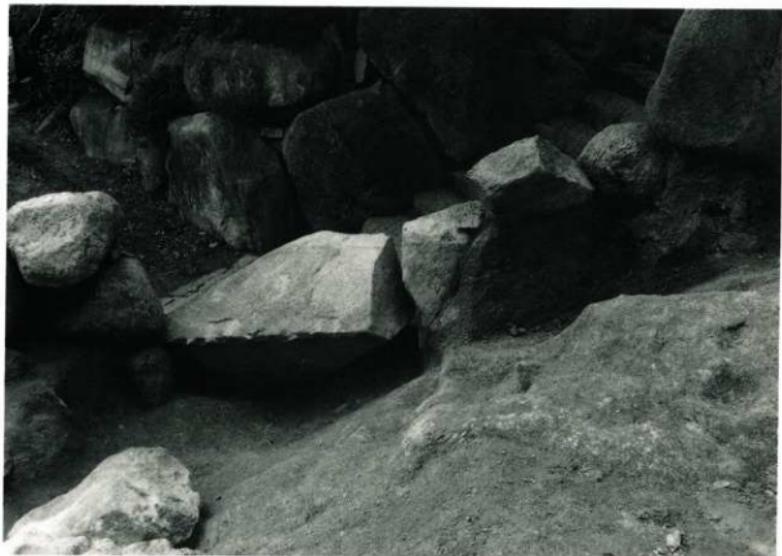
刻印石 1
刻印 a



刻印石 1
刻印 c



刻印石 1
矢穴痕



刻印石 2 遠景（東から）



刻印石 2 近景（南東から）



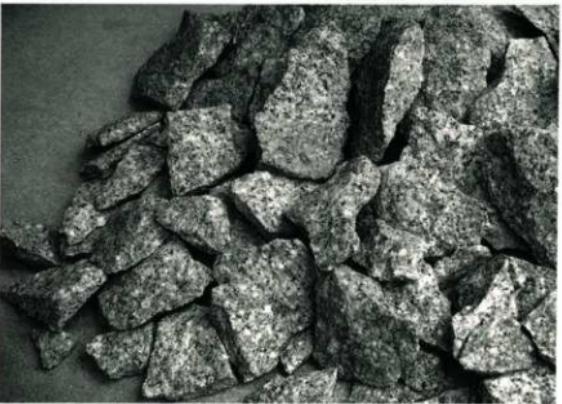
刻印石 2 近景
(北西から)



刻印石 2 近景
(北東から)



刻印石 2
刻印部分



◆◆◆◆◆◆◆ あとがき ◆◆◆◆◆◆◆

採石場の発掘調査は、敷地全体を射程に入れ、未曾有に出てくる石塊・巨石群の中から自然に転落したもの、人びとが動かしたもの、石工が手を加えたものなど一石一石を入念に調べ、江戸時代初期にこの山林・台地に立ち入った労働者の涙ぐましい作業のようすを考えながら地道に、堀り進める日々の連続である。

ただ、今日、調査も積み重ねられ、採石地での専用的な石切丁場を実際に巧みに分け合った諸大名の具体像も判明しつつあり、六麓荘町の高級住宅地にも大坂城に関わる歴史の息吹をなにがしか感じられるようになった。NHKの大河ドラマに登場するような大名たちのかかえた石工衆がどのようにしてこの土地で境界区分までして工役したのか。暗中模索の域を脱し、史実のいくつかを本書において指摘できた点を今は満足し、向後の研鑽を約したい。

(森岡秀人・古川久雄)

表表紙写真▶ 刻印石1 (岩ヶ平刻印群 No.19) 全景。上面の刻印回口は、若狭小浜藩吉極家 (92,000石) のものと見られる。側面には、裏表紙拓影の鳥取藩の刻印があり、当初は小浜藩と鳥取藩の採石丁場を区分する榜示としての役割を持っていたと思われるが、後にこの石材も利用すべく、矢穴を入れて割ろうとしたのである。矢穴列と下取り線は、小口 80cm × 80cm、長さ 1.8m を標準とする調整石を割り取ろうとした意図がうかがえる。撮影 古川久雄。

裏表紙拓影▶ 刻印石1 (岩ヶ平刻印群 No.19) 西側面の刻印拓影 (scale1/5)。○は、因幡・伯耆を領する鳥取藩池田家 (320,000石) の刻印と思われる。採拓 古川久雄。

芦屋市文化財調査報告第42集

平成13年度国庫補助事業

徳川大坂城東六甲採石場 Ⅱ

岩ヶ平刻印群 (第11次) 発掘調査報告書

印刷発行 平成14年3月31日

発行者 芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課

〒659-0085 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL 0797-31-9066

編集者 芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課

〒659-0085 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL 0797-31-9066

印刷 グランド印刷株式会社

〒770-0941 徳島県徳島市万代町6丁目20-15

TEL 088-622-8448

Ashiya Archaeological Record 42



2002.3

Ashiya City Board of Education, Japan

